

大阪府感染症発生動向調査週報（速報）

2019年 第30週（7月22日～7月28日）

今週のコメント

～手足口病～ 手洗いの励行、排泄物の適切な処理とタオルを共用しないことが重要

定点把握感染症

「手足口病 さらに減少」

第30週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は3,111例であり、前週比6.5%減であった。定点あたり報告数の第1位は手足口病で以下、感染性胃腸炎、ヘルパンギーナ、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、伝染性紅斑の順で、定点あたり報告数はそれぞれ4.53、4.17、1.93、1.77、1.07であった。

手足口病は前週比25%減の892例で、大阪市西部6.00、大阪市北部5.85、北河内5.82、豊能 5.55、中河内5.45であった。

感染性胃腸炎は10%増の821例で、南河内8.50、北河内5.82、中河内5.20、三島4.24、大阪市北部3.85である。

ヘルパンギーナは2%増の380例で、大阪市北部3.69、大阪市西部2.70、北河内2.59であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は2%減の348例で、南河内3.88、中河内2.65、北河内2.15である。

伝染性紅斑は18%減の210例で、泉州1.95、北河内1.56、南河内1.31であった。

第6位のRSウイルス感染症は7%増の150例で、4週連続で増加している。

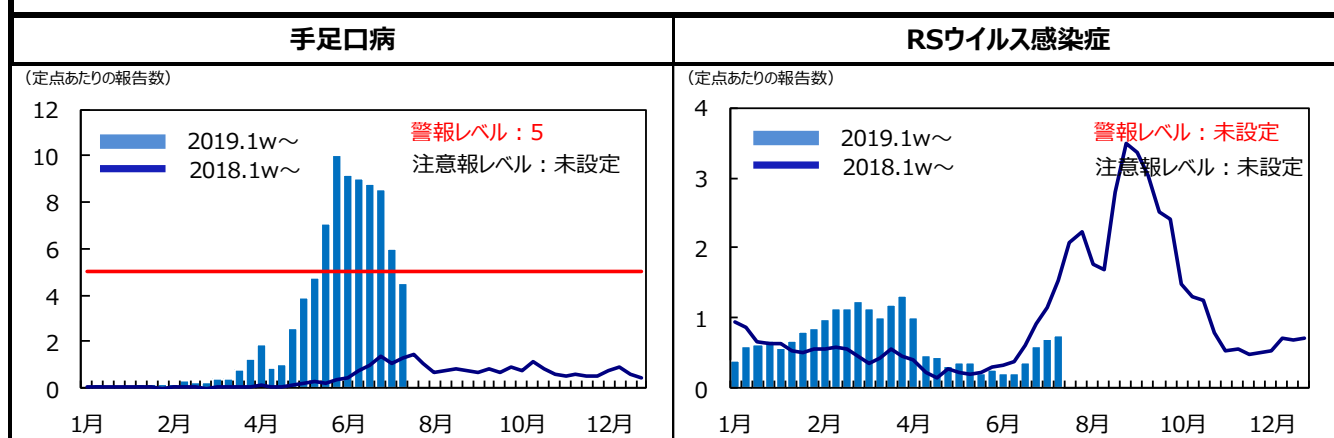


表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2019年 第30週7月22日～7月28日）

第30週の順位	第29週の順位	感染症	2019年 第30週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2018年 第30週の 定点あたり 報告数	2019年第30週の 年齢別 患者発生数 最大割合値
1	1	手足口病	4.53	25%減	1.32	1歳_28%
2	2	感染性胃腸炎	4.17	10%増	4.24	1歳_19%
3	3	ヘルパンギーナ	1.93	2%増	2.39	1歳_26%
4	4	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.77	2%減	1.82	4歳_14%
5	5	伝染性紅斑	1.07	18%減	0.14	5歳_22%

第30週のコメント

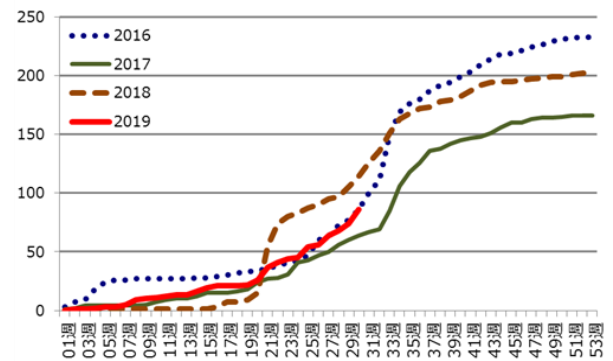
～腸管出血性大腸菌感染症～ 食肉・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ベロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものはO(オー)157、O26、O111がある。汚染飲食物を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症症候群を起こす場合がある。3-5日の潜伏期において、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる（出血性大腸炎）。発熱は軽度で、多くは37℃台である。有症者の6-7%では、発症数日後から2週間以内に、重症の溶血性尿毒症症候群を発症する。

(累積報告数)



[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)

[腸管出血性大腸菌感染症とは\(国立感染症研究所\)](#)

表2. 大阪府全数報告数（2019年 第30週7月22日～7月28日）

注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります
(報告があった疾患のみ記載しています)

	疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
3類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	12	1	2			5			4	86
4類感染症	レジオネラ症（肺炎型）	3					3				48
5類感染症	アメーバ赤痢	1	1								46
	ウイルス性肝炎（B型）	1								1	12
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	2								2	99
	急性弛緩性麻痺	1							1		3
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1					1				32
	後天性免疫不全症候群	1						1			70
	梅毒	8	1							7	628
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	1			1						18
	百日咳	9	1		1		1	1	1	4	539
	風しん	2			1					1	122
麻しん	2								2	147	
結核 (2019年5月分)	結核 新登録患者数：150名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 49名) (府内累積報告数 708名、内 肺・喀痰塗抹陽性 267名)										

(2019年7月30日 集計分)